

千葉市感染症発生動向調査情報

2024年 第45週 (11/4-11/10) の発生は？

1 定点報告対象疾患(五類感染症)

上段: 患者数 下段: 定点当たりの報告数 「定点当たりの報告数」とは 報告数/報告定点数	報告のあった定点数	定点	45週	44週	43週	42週	*正式名称は インフルエンザ/COVID-19定点
		小児科	18	18	18	18	
		眼科	5	5	5	5	
		*インフル/COVID	28	28	28	28	
		基幹	1	1	1	1	

定点	感 染 症 名	千 葉 市					千葉県 10/28-11/3
		注意報	11/4-11/10	10/28-11/3	10/21-10/27	10/14-10/20	
			45週	44週	43週	42週	
小児科	RSウイルス感染症		2 0.11	3 0.17	0 0.00	0 0.00	12 0.10
	咽頭結膜熱		1 0.06	0 0.00	0 0.00	0 0.00	20 0.16
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	→	32 1.78	32 1.78	34 1.89	14 0.78	360 2.88
	感染性胃腸炎	↓↓	39 2.17	77 4.28	58 3.22	33 1.83	351 2.81
	水痘		0 0.00	2 0.11	1 0.06	1 0.06	22 0.18
	手足口病	★★★↓	225 12.50	248 13.78	275 15.28	263 14.61	1522 12.18
	伝染性紅斑		6 0.33	2 0.11	3 0.17	10 0.56	75 0.60
	突発性発しん		5 0.28	3 0.17	4 0.22	9 0.50	29 0.23
	ヘルパンギーナ		1 0.06	10 0.56	11 0.61	6 0.33	28 0.22
	流行性耳下腺炎		1 0.06	1 0.06	0 0.00	1 0.06	8 0.06
* インフル /COV ID	インフルエンザ (高病原性鳥インフルエンザを除く)	◎	28 1.00	18 0.64	19 0.68	12 0.43	400 2.00
	新型コロナウイルス感染症	↓↓	23 0.82	34 1.21	28 1.00	28 1.00	400 2.00
眼科	急性出血性結膜炎		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	流行性角結膜炎		4 0.80	0 0.00	6 1.20	2 0.40	30 0.88
基幹	クラミジア肺炎 (オウム病を除く)		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	細菌性髄膜炎 (髄膜炎菌性髄膜炎を除く)		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	マイコプラズマ肺炎	◎	5 5.00	3 3.00	3 3.00	2 2.00	9 1.00
	無菌性髄膜炎		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00

★★:流行中 ★:やや流行中 ◎:増加 ○:やや増加 →:変化なし ↓:やや減少 ↓↓:減少

「流行中」 流行発生警報開始基準値以上

「やや流行中」 流行発生注意報基準値以上、又は流行発生警報開始基準値を下回った後に流行発生警報終息基準値以上

2 全数報告対象疾患: 11 例

病名	性	年齢層	診断(検査)方法	病名	性	年齢層	診断(検査)方法
結核	男性	50歳代	IGRA検査	急性脳炎	女性	30歳代	高熱
	女性	60歳代		侵襲性肺炎球菌感染症	男性	70歳代	病原体の検出
	女性	80歳代		梅毒	女性	20歳代	血清抗体の検出
	男性	80歳代	男性		40歳代		
	男性	80歳代	男性		60歳代		
レジオネラ症	男性	80歳代	病原体抗原の検出	-	-	-	-

・第45週は、結核5例(134)、レジオネラ症1例(8)、急性脳炎1例(15)、侵襲性肺炎球菌感染症1例(8)、梅毒3例(64)の発生届があった。

※ ()内は2024年の累積件数。但し、累積件数は速報値であり、データが随時訂正されるため変化します。

定点当たり報告数 第45週のコメント

<A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

前週から横ばいとなり1.78のままとなった。過去10年の同時期と比べるとほぼ平均レベルで、年齢階級別の報告数は10歳未満では6歳が最多。区別では、稲毛区(5.67)からの報告が最多で10歳未満では7歳の報告が多かった。

<感染性胃腸炎>

前週より減少し2.17となった。過去10年の同時期と比べると少なく、年齢階級別の報告数は1歳が最多。区別では、若葉区(7.50)からの報告が最多で1歳の報告が最も多かった。

<手足口病>

前週よりやや減少し12.50となったが、流行発生警報開始基準値(5.0)を上回ったままで過去10年の同時期と比べると最多のまま。年齢階級別の報告数は5歳が最多。区別では全区が流行発生警報開始基準値以上となり、若葉区(22.00)が最多で3歳の報告が最も多かった。

<インフルエンザ>

前週より増加し、流行開始の目安とされる1.00となった。年齢階級別の報告数は10-14歳が最多で、10歳未満では3歳が多い。区別では、中央区(2.60)からの報告が最多で10-14歳の報告が最も多く、10歳未満では3歳が多かった。

<マイコプラズマ肺炎>

前週より増加し5.00となった。第40週から連続して報告があり、累積報告数は22例となり、過去5年で最多を更新し続けている。

■ 「過去10年との比較グラフ」及び「区別の発生グラフ」はWebSiteでご覧いただけます。

・ 過去10年との比較グラフ

<https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/iryoisei/khoken/kkagaku/idsc/documents/graph2024.pdf>

・ 区別の発生グラフ

https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/iryoisei/khoken/kkagaku/idsc/documents/graph_ward2024.pdf

■ トピック ■

<インフルエンザ>

全国の第44週現在の定点当たりの報告数は1.04となり、流行開始の目安とされる1.0を上回りました。都道府県別では、沖縄県(10.64)が最も多く、次いで静岡県(2.09)、千葉県(2.00)の順となっています。

千葉市の第45週は前週から増加し1.00となりました。新型コロナウイルス感染症が流行し始めた2020年以前の2015年から2019年の同時期と比べると2週間早く1.00に達しました。

今シーズンである2024年第36週から第45週までについて、定点医療機関からの患者報告数は男性67例(48.6%)、女性71例(51.4%)の138例で、年代別では0-9歳(51例、37.0%)が最も多く、次いで10-19歳(47例、34.1%)、40-49歳及び50-59歳(9例、6.5%)の順となっています(図1)。この内0-9歳では6歳(9例、51例中17.6%)が最も多く、次いで3歳及び4歳(8例、51例中15.7%)となっています(図2)。直近4週では10-19歳の増加が著しくなっています(図3)。

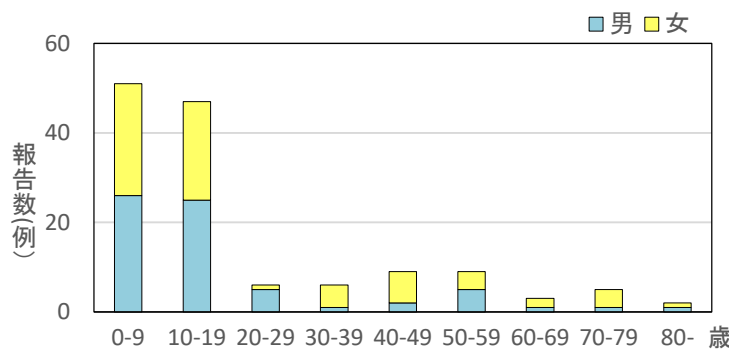


図1 性別・年代別患者報告数
(2024年第36週-第45週 n=138)

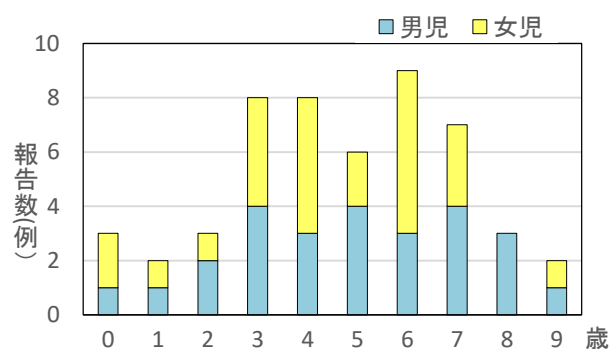


図2 性別・年齢別患者報告数
(0-9歳: 2024年第36週-第45週 n=51)

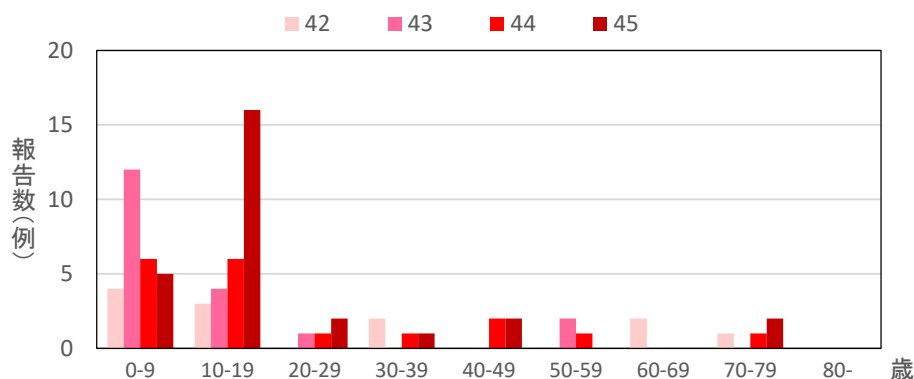


図3 週別・年代別報告数(直近4週分)

定点医療機関の協力による138例の迅速診断結果は、A型120例(87.0%)、B型4例(2.9%)、A and B型(A型とB型両方陽性)0例、A or B 型(型非鑑別キットで陽性)4例(2.9%)、検査未実施10例(7.2%)となっています。

インフルエンザは、インフルエンザウイルスに感染することによって起こる病気です。38℃以上の発熱、頭痛、関節痛、筋肉痛、全身倦怠感等の症状が比較的急速に現れるのが特徴です。併せて普通の風邪と同じように、のどの痛み、鼻汁、咳等の症状も見られます。子どもではまれに急性脳症を、高齢者や免疫力の低下している方では二次性の肺炎を伴う等、重症になることがあります。

厚生労働省は、令和6年11月11日付けで全国の自治体へ向けて、今シーズンのインフルエンザの流行に備え予防対策の徹底に留意するよう通知を発出しました。

インフルエンザをはじめとする感染症の予防には、「手洗い」「マスクの着用を含む咳(せき)エチケット」などが有効です。

特に、高齢者や基礎疾患のある方が感染すると、重症化するリスクが高まります。高齢者と会ったり、通院や大人数で集まったりするときは、マスクの着用を含めた感染症対策へのご協力をお願いします。

また、インフルエンザワクチンには、発症をある程度抑える効果や、重症化を予防する効果があり、特に高齢者や基礎疾患のある方など、罹患すると重症化する可能性の高い方には効果が高いと考えられます。日本では、インフルエンザは例年12月から4月頃に流行し、例年1月末から3月上旬に流行のピークを迎えますので、12月中旬までにワクチン接種を終えることが望ましいと考えられます。令和6年10月現在、インフルエンザワクチンについては、皮下投与の不活化ワクチン(インフルエンザHAワクチン)と経鼻投与の弱毒生ワクチン(経鼻弱毒生ワクチン)の2種類が国内で流通しています。インフルエンザHAワクチンは6ヶ月以上の者、経鼻弱毒生ワクチンは2歳以上19歳未満の者が対象となっています。

その他、適度な湿度の保持、十分な休養とバランスのとれた栄養摂取、人混みや繁華街への外出を控えるといった対策をすることが大事です。

詳細は、以下のリンク先を参照してください。

【令和6年度】今シーズンのインフルエンザ総合対策(厚生労働省)

<https://www.mhlw.go.jp/stf/index2024.html>

令和6年度インフルエンザQ&A(厚生労働省)

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekaku-kansenshou/infuenza/QA2024.html

「インフルエンザ関連情報」(千葉市)

<https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/iryoeisei/khoken/kkagaku/idsc/influ.html>